

マタイによる福音書6章9－15節 「主の祈り」

1A 礼拝 9－10

1B 天の父 9

2B 御名 9

3B 御国 10

4B 御心 10

2A 願い 11－13

1B 日用の糧 11

2B 負い目 12

3B 試み 13

4B 礼拝 13

3A 赦しの命令 14－15

本文

私たちの山上の垂訓の学びは、先週でマタイ6章8節まで来ました。そして9節でイエス様が、こう祈りなさいと命じられた祈りに入ります。イエス様が弟子たちに命じられた「主の祈り」に注目します。この祈りは、教会の礼拝において、何度となく祈られてきた祈りです。ぜひ覚えてみてください。文語訳ですが、いっしょに唱えてみましょう。「天にまします我らの父よ。願わくは御名をあげさせたまえ。御国を来たらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みに会わせず、悪より救いだしたまえ。国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり。アーメン。」

イエス様が、この祈りを祈りなさいと命じられた背景をご説明します。祈りというのは、天地を造られる神を信じるユダヤ人であっても、また偶像を拝む異邦人であっても、まことの神、あるいは神々に限らず、万人が誰でも行うことです。それはまさしく、「私は、神は信じない」という人でも、実は神がいなければいけないのだという心の渇きを証ししています。私も思い出しますが、福音を言葉で論理的に伝え、理解し、信じてもらおうとすると抵抗を感じる人であっても、祈りであれば、受け入れてくださる方々が大勢にいます。このように神は、ご自分がおられることを、人々がだれでも祈りたいと願う、その願いを植えこまれています。

そうした中でイエス様は、ご自分に付いてくる弟子たちには、ぜひこうやって祈ってほしいと願う祈りを紹介されました。ユダヤ人、すなわち神の御心、願われていることを知っている人々の中でも、その宗教指導者がいのる祈りは、人に見せるための祈りになっていると言われました。前回

学びましたが、弟子たちには、パリサイ派や律法学者にまさる義がなければ、天の御国に入ることとはできないと言われていました。パリサイ派の過ちは外側の行いに夢中になってしまったことです。外の行為についてのみ取り扱い、人々の内なる態度、姿勢をないがしろにしていました。

その中でイエス様は、「天におられる父」と神と呼ばれました。自分の敵を愛して、迫害する者を祝福して、彼らのために祈りなさいと言われていたのですが、その根拠は、「天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。」とのことです(6:45)。太陽を、善人だけでなく悪人にも注いでくださっているように、この方を、父を仰いでいるのだから、あなたがたも真似して、敵であろうと誰であろうと、相手から何かをされてから愛したり、憎んだりするのではなく、父に倣うということで、神の愛を受けて、その愛をもって愛しなさいということです。つまり、父と子という関係、その関係の中で生きて行きなさいということでもあります。

ところがユダヤ人は、人に見せるための祈りを捧げていました。人々に霊的に聞こえる、「ああ、この人はとても神を敬っているのですね」と言わせるような、印象づけるような祈りを捧げていました。つまり、神相手ではなく、人相手なのです。神に対する個人的、人格と人格のふれあいのような祈りではなく、人から良く思われるようなものにしか過ぎませんでした。その一方で、偶像しか知らない異邦人は、何度も繰り返しているならば、言葉数が多ければ、それだけ神に祈りを聞いてもらえると思っていました。人にではなく、神に印象付けたいと思っているのです。けれども、そんなことは、父なる神には無意味なことです。子がお父さんに気に入られるように、受け入れられるように、何か動くでしょうか？ないですね、むしろ既に気に入られ、愛されていることが分かっているから、何かを願う時に願うことができます。これが、主の祈りの背景です。では、聖書を開いて、マタイ6章9節からご覧ください。

1A 礼拝 9-10

9 ですから、あなたがたはこう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされま
すように。10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。

イエス様をご自分に付いてきている者たちに、祈りなさいと命じておられることは、初めはここ9-10節にある礼拝です。神を神としてあがめること。神がどのような方であり、神が何を行なっておられ、何をこれからされるのか？初めに神を神としてあがめることが、祈りの中に来るということは素晴らしいことです。その次に11-13節にある、自分たちのために神に、してくださいとお願いする祈りを捧げます。私たちが祈る時に、もちろん願い事があることは当然です。私たちが必要を覚えて、それを神に祈ることは当然です。けれども、祈りの目的というのは、自分の願いを神に聞いてもらい、それで神がその願いにそって動いてくださる、ということではありません。祈りの目的は、神が願われていること、神のなさりたいことが、私たちの祈りを通して行われることでもあります。祈りは神から始まり、神によって成り、神に至るようになることが目的です。

1B 天の父 9

そして、「天にいます私たちの父よ。」と呼びかけます。私たちにとって祈りは、誰に話しているのかが大事です。私たちはとかく、自分のことで思いがいっぱいで、そのことを話していて、誰に対して話しているのかをあまり考えません。けれども、誰に呼びかけているのか？ということです。私たちは、そこら辺にある木や石で造られた像に語りかけているのではなく、死んだ人に語りかけてもいません。生ける神、天地を創造した方に祈っています。聖書には、数多く、天地を造られた方に話していることを、意識して祈りの中でも話していることが沢山あります。使徒の働きで、ペテロとヨハネが主の言葉を語ったために捕えられて、釈放された後に、教会の人たちは祈りました。「主よ。あなたは天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた方です。(6:24)」主のことは語るなど堅く言いつけられたのですが、いや、主が天と地と、海とその中のすべてのものを造られた方なのだ、神を思い出して祈ったのです。

けれどもイエス様は、ここでそれだけに留まりませんでした。「天にいます私たちの父」と呼びかけるようにと願っておられます。イエス様ご自身が、神に祈った時にこう祈られました。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。(ルカ 10:21)」天地の主であり、かつ父である方です。このようにして、関係性の中で祈ります。天地を造られた神を自分の父として、敬い、従い、そして愛されている存在として祈るのです。「ローマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」イエス様は、弟子たちがこれまでイエス様に頼み、イエス様が父なる神に祈っておられたのですが、ご自身が十字架につけられ、甦り、それから天に昇られてからは、父に直接、祈ることができることを教えられました。「ヨハネ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。」イエス様を自分の救い主として心に受け入れているのであれば、聖霊が与えられており、そのままイエス様の名によって、父なる神に話しかけることができます。

そして、も「**私たちの父**」と言っていますね。ここに、私たちがばらばらではないことを示しています。父なる神にあって一つにされて、一つの御霊によって神に祈ります。共同体として祈っています。私たちが祈る時に、独りで祈っていたとしても、それでも他の兄弟たちと共に家族となって、一つとされている中で、それで今、祈っているのだと言う思いは大切です。

2B 御名 9

そして、「**御名が聖なるものとされますように。**」とあります。ここの「聖なるもの」というのは、「あがめられる」とも言える言葉です。神の御名があがめられるように、尊く、恐れ多く、聖なるものがありますようにという祈りです。神ご自身をあがめる祈りです。「名前」というものは、聖書の中で、またユダヤ人の中でとても大切にされています。名の中に、神の本質、その栄誉、名誉、栄光、す

べてのものが含まれると考えられていたからです。神の名について、ユダヤ人は限界をもった、不完全な人間がその名を発音してはならないと思うほど、御名を尊んでいました。それで、神を単に「御名」と呼び、また「主人」という意味のアドナイを用いています。そして、聖書ではYHVHという、子音だけの名前になっています。それを、「ヤハウェ」と呼ばれていたのではないかと言われます。

ですから、ただただ主をあがめる、主をほめたたえる、この方のすばらしさ、偉大さ、聖さ、正しさ、恵み深さ、その栄光をほめたたえます。私たちの願いが、主の御名をあがめること、また人々が主の御名をあがめることになっているのでしょうか？ イエス様の生涯は、ご自分の父の御名を知らせることでした。「あなたが世から選び出して与えてくださった人たちに、わたしはあなたの御名を現しました。(ヨハネ 17:6)」

3B 御国 10

そして次に、「御国が来ますように。」と祈ります。初めの祈りが、父に対して祈っているという関係性であれば、ここではこの方が支配してくださるように、という祈り、支配について祈っています。御国とは、神が支配されている領域のことです。神が王となっている領域が来ますように、という祈りです。

私たちが、父の御名があがめられるようにと祈れば、すぐにそうではない現実気づきます。それは、アダムが罪を犯した時以来、世界にはサタンの支配、サタンの国が入ってきたからです。しかし神は、そこからご自分の名があがめられている天を地にもたらそうとされています。それで、イエス様は、バプテスマのヨハネの宣教と同じように、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」と言われたのです。私たちが悔い改めることによって、神の支配が自分のところにも及びます。ですから、御国は「今」あると言えるでしょう。「コロ 1:13 御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配(御国)の中に移してくださいました。」「ローマ 15:17 なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。」聖霊による神の支配を私たちは今、強く求めます。

けれども、そのまま御国が地上に実現する時、つまり将来のキリストの再臨の時もあります。ダニエルがかつて、ネブカドネツアルの見た夢を解き明かしました。今も、サタンの支配は人間を王とする国、人間の支配によって続いています。しかし、それが終わる時が来ます。「ダニ 2:44 この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。」黙示録 11 章にも、キリストの再臨が実現したことを賛美する言葉があります。「11:15 この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」

ですから、私たちは、サタンの支配をいつも感じながら、しかし自分自身が神の国の中にいることを知りながら、その葛藤の中に生きています。まさに、神は私たちを、ご自分の国の最前線に置き、そして闇の中にいる人々が光に導かれるように、神に立ち返って、罪の赦しを得て、同じように神の御国に入ることができるように導かれています。その中で常に私たちは、緊張状態に置かれています。だから、私たちにとって「御国が来ますように」というのは、切実な祈りになるはずです。

4B 御心 10

そして、「みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」とあります。天においては、神の御心がことごとく行われています。黙示録 4 章と 5 章にて、天において何が行われているかを見ることができますが、一言でいうならば礼拝です。人々が御座の前でひれ伏し、賛美を捧げています。神に仕えています。その天のみこころが、地でも行われるはずのところ、アダムが罪を犯したので地が呪われたものとなってしまいました。それで、地においては、必ずしも天で御心が行われているように、御心が行われているわけではありません。神の理想とは、程遠い姿があります。ですから、神の御心が天において行われているように、行ってくださいと祈るのはとても大切です。

黙示録には、天において御心が行われているけれども、地では神への反抗と罪が続き、神の国ではなく、獣の国ができて、神を冒瀆している姿がでできます。けれども、神が御怒りを地上に下し、イエス様が戻って来られて、千年の間、悪魔が底知れぬ所に鎖につながれている姿があります。千年後に解放されますが、ついに火と硫黄の池に投げ込まれて、最後の審判があります。それから、新しい天と新しい地が造られます。そして天からエルサレムが降りてくるのです。ここで、初めて天の御心が地でも行われる完全な姿を見ることができます。

そこで、私たちの祈りがこうなっているでしょうか？天にある御心ではなく、自分の願い、自分の意志がなりますように、という祈りです。これは、正反対ですね。イエス様がゲッセマネの園で、「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。(マタイ 26:39)」と祈られました。絶えず、父なる方が望まれるままにしてくださいと祈るのです。

2A 願い 11-13

このように、祈っている相手が父なる神であることを知って、それから御名があがめられるように、御国が来るように、そして御心の天になるように、地にもなるようにと祈って、次に三つの願いが書いてありますが、これが非常に驚くものです。

1B 日用の糧 11

11 私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。

神の御名、神の国、神の御心といった大きな神の働きを祈ったのに、突然、日毎の糧を与えてくださいということは、一体どういうことでしょうか？まず、当時、私たちのように豊かな社会に生きていませんでした。多くの貧しい家庭は、次の日の食べ物がどうなるか？という課題があったに違いありません。そしてもう一つ、主は私たちの生活の、生活臭の漂うような領域で、ご自分の御名が聖なるものとされたいし、御国が広がってほしい、御心を行いたいと願っておられます。神の御国というのを、何か抽象的な、神学的な世界で語られるのではなく、今の食べ物、スーパーマーケットで売られている食べ物のような、私たちのもろ、日常生活で、しかも生きて行くためのところで、主が御心を行いたいと切に願っておられます。私たちの祈りは、こうした具体的などころで願いを神に申し上げる時に、実現していきます。

ここで父なる神の配慮があるでしょう。それぞれのお父さんが、自分に対してどれだけのおこずかいを与えたでしょうか？父は惜しみなく息子あるいは娘に与えたいと願いますが、それを一度に与えるとその賜物に圧倒され、その賜物に溺れてしまい、神をかえって見失うかもしれません。ここで、神をいつも思い出し、神により頼むことができます。「ロマ 8:32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」私たちの天におられる父は、惜しみなく与えることができになります。「私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいませ。(ピリピ 4:19)」

2B 負い目 12

12 私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。

日用の糧のような肉体に関わることを祈ることは、重要です。日々の必要が満たされて、それで霊的生活を歩めます。次にイエス様は、人を赦すという生活において死活的なことを祈りなさいと命じておられます。14-15 節にも、人を赦すことについて語られます。言い換えると、悔い改めて、罪が赦されることによって、天の御国に入る人々が出て来ることによって、御国が広がります。神の御名があがめられます。

そしてここで、負い目のある人たちを赦すということが、いかに大切なことであるかを、自分自身が神から負い目を赦していただくことに深く関わるのだということです。神は、ご自身と私たちの間にある問題、つまり罪を、取り除くためにご自分の御子をさえ遣わされました。それだけのことを神が行われたのですから、その赦しを受けた人々の間には、互いへの赦しも広がってほしいと願われています。実に、罪を赦される神が互いの間に住みたいと願われているのです。

ここで、あたかも自分の負い目を赦してもらうために、他の人々の負い目を赦すというように聞こえるかもしれませんが、しかし、そのようなものではありません。人に対する赦しの中に、神が自分

を赦してくださったことが見せられるようにという願いです。自分が人を赦せていないということは、元々、はたして自分自身が神からの赦しを受け入れているのか疑わしいものです。神からの罪の赦しと、人への赦しは切って切り離せないものであります。

3B 試み 13

13 私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください。

日用の糧が肉体に関わる事、人の負い目を赦すことが精神に関わる事であれば、この、「悪からお救いください」というのは、霊に関わることです。「試み」というのは、誘惑であるし、また試練もあるでしょう。主が、誘惑や試練で悪から救ってくださる約束はありますが、そこには私たちの祈りも関わって来る、ということです。「1コリント 10:13 あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」約束はしておられるのですが、それでも祈ることによって脱出できるようにということなのです。

私たちは、天の御国が地上において入り込んで、その前のほうに住んでいます。ゆえに、悪の現実常に触れています。ですから、そこで誘惑を避けることはできません。ここでの祈りは、全く試みがないようにということではなく、そのようなことあっても試みから抜け出すことができるようにという願いです。このようにして、絶えず信仰的に前進し、ヨシュアがかつて攻め取った土地を自分のものとしていったように、主が私たちに、神の支配する土地を拓けてくださいます。

4B 礼拝 13

そして、本文には出てきませんが、「国と力と栄えは、とこしえのあなたのもだからです。」とあります。神の国、神の力、神の栄えです。願い事を神に知っていただいたのは、まさしく神への礼拝に至ります。神への礼拝から始まり、願いをし、それから再び礼拝に戻るのです。とても、シンプルな祈りですが、私たちが果たして、主が言われたように祈れるでしょうか？けれども、この中にいつも留まっていられるか？であります。

3A 赦しの命令 14-15

そしてイエス様は、赦しについて取り上げられます。

14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦して下さいます。15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません。

いかに、祈りと赦しが深く関わっているかがわかります。それだけ、私たちの生きている世界は、罪とつまずきが多いということです。だからこそ、私たちはそういった限界を知っているのだから、

むしろ豊かに赦し合うという習慣と文化が必要だということです。イスラエルが見捨てられないのは、神が豊かに赦されたからでした。そして、弟子たちがイエス様に従えたのは、彼らがイエス様を見捨てたのにそれでもついて行けたのは、イエス様が赦されたからでした。そしてキリスト教会が、それでも教会として成り立っているのは、キリストの流された血によるものであり、その犠牲によって、初めて立っていることができます。私たちが、その犠牲をないがしろにははいけません。このような厳粛な赦しがあるからこそ、私たちは心を平安に保ち、喜びを持つことができます。そして、互いに赦し合うことによって、赦しの神が私たちたちの間に留まっておられるのです。「エペ 4:32 互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださいましたのです。」